成年期以降の孤独感の年代差と関連要因の検討

○豊島 彩¹・佐藤真一¹

(¹大阪大学大学院人間研究科)

キーワード：孤独感・高齢期・性格特性

The age difference of loneliness and the relevant factors among adulthood

Aya TOYOSHIMA¹& Shinichi SATO¹

(¹Graduate School of Human Sciences, Osaka University)

Key Words: Loneliness, Older adults, Personality

目 的

成年期以降、特に高齢期では喪失経験が多くなると想定されるが、主観的ウェルビーイングは維持されることが報告されている (e.g., Löckenhoff & Carstensen, 2004)。社会的側面に注目すると、高齢期は退職や死別経験をきっかけに、社会的ネットワークが縮小されることが考えられる。しかし、高齢期の孤独感は若い世代と比較して同程度、もしくはそれ以下とされる (Pinquart & Sörensen, 2001)。しかし、孤独感が加齢に伴い段階的に低下するのか、ある年代を境に低下するのかは明らかではない。

本研究は、成年期、中年期、高齢期を対象に調査を行い、孤独感の年代差がどの年代間で見られるかを明らかにすることを第一の目的とした。さらに、孤独感と関連要因との関係性を年代間で比較し、年代で異なるかを検討することを第二の目的とした。

方 法

株式会社クロス・マーケティングに委託し、2015年10月にインターネット調査を実施した。

対象者は高齢期群として69-71歳の男女500名、中年期群として49-51歳の男女500名、成年期群として29-31歳の男女500名とした。

質問項目として、孤独感を測定するため UCLA Loneliness Scale version3 の日本語版 (豊島・佐藤, 2013) を用いた。関連要因として性別、婚姻状況、主観的健康度、主観的経済状態、友人との接触頻度、性格特性 (並川他, 2012) を尋ねた。

分析では、孤独感の年代差を確認するため、孤独感を従属変数とし、年代 (成年期・中年期・高齢期) と性別 (男性・女性) を独立変数とした 3×2 の分散分析を行った。次に、関連要因と孤独感の関係を検討するため、孤独感を従属変数とした階層的重回帰分析を年代別に行った。

結 果

分散分析の結果、交互作用項は非有意 ($F(2, 1494) = 2.17, p = .11$) であり、年代 ($F(2, 1494) = 48.00, p < .01, \eta^2 = .06$) と性別 ($F(1, 1494) = 32.85, p < .01, \eta^2 = .02$) の主効果がありであった。年代について、多重比較の結果、高齢期群と中年期群、高齢期群と成年期群の間に1%水準で有意差が見られた (Figure1)。よって、高齢期群は成年期群と中年期群よりも孤独感が低いことが分かった。

重回帰分析の結果、概ねどの群も偏重回帰係数の正負の向きは同一であった。しかし、高齢期群では誠実性の高さと孤独感の低さに関連が見られた ($\beta = -.10, p < .01$)。性格特性を投入する前のステップでは主観的経済状況が有意であったが、誠実性を投入したステップでは非有意となっていた。

Note: ** $p < .01$

考 察

本研究の結果から、孤独感は中年期から高齢期にかけて低くなることが明らかとなった。性差について、男性の方が女性よりも孤独感が高い結果となった。Russel (1996) や豊島・佐藤 (2013) は、同様の傾向を報告しており、本研究ではそれを再現する結果であった。

重回帰分析の結果、ほとんどの関連要因と孤独感との関連に年代差は見られなかった。しかし、高齢期群のみ、誠実性の高さと孤独感の低さが関連することが示された。誠実性が高い者は健康状態や経済状況が良好であることが考えられ、身体や経済状況の変化が孤独感に与える影響に、誠実性が関わると考察した。今後の展望として、媒介分析により誠実性の間接効果の検討を行う必要がある。

(本研究は、平成 27～29 年度科研費 (課題番号 T15KT00900 研究代表者 佐藤真一) の助成を受けた)

引用文献

- Löckenhoff, C. E., & Carstensen, L. L. (2004). Socioemotional selectivity theory, aging, and health: The increasingly delicate balance between regulating emotions and making tough choices. *Journal of Personality*, 72, 1395-1424.
- 並川 努・谷 伊織・脇田 貴文・熊谷 龍一・中根 愛・野口 裕之 (2012). Big Five 尺度短縮版の開発と信頼性と妥当性の検討. *心理学研究*, 83, 91-99.
- Pinquart, M., & Sörensen, S. (2001). Influences on loneliness in older adults: A meta-analysis. *Basic and applied social psychology*, 23, 245-266.
- Russell, D. W. (1996). UCLA Loneliness Scale (Version 3): reliability, validity, and factor structure. *Journal of Personality Assessment*, 66, 20-40.
- 豊島 彩・佐藤 真一 (2013). 孤独感を媒介としたソーシャルサポートの授受と中高年者の精神的健康の関係—UCLA 孤独感尺度第3版を用いて— *老年社会科学*, 35, 29-38.